



みなさま、明けましておめでとうございませう。今年こそ、戦争に疲弊した地に平和が訪れることを、火種をかかえた国同士がおだやかに交流できるよう、祈らずにはいられません。

11月には無事「寂聴忌の集い」を終えることができました。出演・参加・協力してくださったみなさまに感謝いたします。

「寂聴文学を愉しむ会」Ⅲ

今年も「寂聴文学を愉しむ会」を開催いたします。寂聴の随筆『嵯峨野日記』を7回にわたって読む予定です。

この随筆は出家して約2年半を経て「週刊朝日」に連載（1976年7月～78年12月）されたもので、出家して自然の素晴らしさに目ざめた寂聴の日常生活や人々との交流が綴られています。

小説『比叡』が正面きつたポートレートとすれば、この作品は側面、裏面から出家生活を書いていて、「ジャンルを異にする両著、互いに相補って好一对をなす」（佐伯彰一氏）と評されています。

単行本上・下は1980年、文庫本

は1986年、新潮社より刊行されていますが、現在では入手困難になっています。

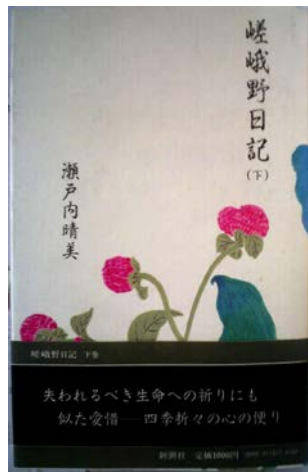
参加希望者はテキスト配付の都合がありますので、事務局までご連絡ください。参加できる回のみのお席も可。原則として文学書道館2階で14時からおこないます。テキストは該当回の前に配付予定です。

- 第一回 4月24日（金） 担当 東條眞理子
- 第二回 5月22日（金） 担当 松尾初夏
- 第三回 7月24日（金） 担当 賀来真留加
- 第四回 9月25日（金） 担当 清重康代
- 第五回 10月23日（金） 担当 藤村純子 森 裕子
- 第六回 1月15日（金） 担当 大石征也
- 第七回 2月19日（金） 担当 竹内紀子

第7号
2026年
1月15日発行
瀬戸内寂聴
記念会

題字
島田聖翠

寂聴著
『嵯峨野日記』



浜野佐知監督「金子文子
何が私をこうさせたか」
上映会

寂聴さんが『余白の春』で描いた社会活動家・金子文子を、徳島出身の映画監督・浜野佐知さんが、死刑判決が出て亡くなるまでに焦点をあてて映画にしました。2月、東京で公開されますが、徳島では瀬戸内寂聴記念会主催（協賛 徳島でみれない映画をみる会）で上映いたします。

日時 6月7日（日）2回
（午前1回・午後1回）上映
午後の上映前に浜野監督の
舞台挨拶を予定

会場 シビックセンター

さくらホール
チケット（前売り・当日共）
1000円

東京上映会のチラシ

行事報告

11月1日 寂聴忌句会

文学書道館にて午後1時より、10人が集まり、句会を開きました。うれしいことに全句に票が入りました。

佳きものに男の正座寂聴忌 初夏

つやちゃんとハアちゃんのいた露地に月薫

みちのくの熊鎮めたまへ寂聴忌 眞理子

母の帯出して広げる寂聴忌 裕子

野枝須賀子文子を想ふ寂聴忌 紀子

ゴッホもか月も独りと知る人よ 眞理子

夢に見し蘭の残り香寂聴忌 征也

空澄みて水も清みたる寂聴忌 幻太

女性初総理誕生寂聴忌 裕子

秋襲来あわてて咲く金木犀 環

子を抱きし引き揚げの夏眉山見ゆ 紀子

秋風に包まれてゐる寂庵か 幻太

コスモスやあの日あの日女たち 初夏

寂聴忌新たな縁の広がって 加代子

寂聴忌近づき友の恋深む 征也

汗かいて遅い紅葉を見上げてる 耕一

それならば大鬼となれ紅葉山 薫

寂聴忌紅葉色づく記念室 加代子

寂聴忌ぐうたら暮らしにカツ入れる環

夕日みていつのまにか月の影 耕一



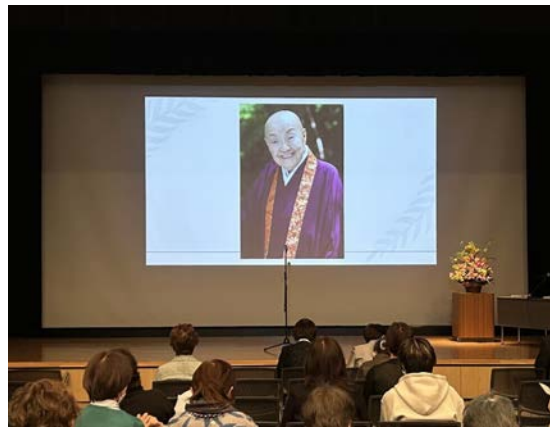
句会風景



11月8日 寂聴忌の集い

シビックセンターさくらホールで午後1時半から4時まで、計90人の参加で開催されました。

東條眞理子会長の開会のあいさつの後、参加者全員で寂聴作詞の「ふるさと賛歌」（曲はベートーベンの「歓喜の歌」）を合唱しました。



東條会長の挨拶



大石副会長「寂聴さんへの手紙」
拝啓 瀬戸内寂聴様

ついこの間まで真夏のようだった気が、ここに来てがらりと変わり、寒さに向かいはじめました。立冬が昨日。今日8日は、冬の初め、と考えていいのでしょうか。

秋が無かったものですから、金木犀は大慌てで、その香り高い小花を、枝いっぱいにつけて、道ゆく私たちに、精いっぱいアピールしています。

2021年11月9日にあなたが亡くなられてから、明日で丸4年。光陰矢の如しと言いますが、早いものですね。忘れっぽいのが人間の性。でも、私たちがあなたを忘れることはありません。あなたには、数多くの、すぐれた作品があります。あなたの作品を、手にとつてページをめくるたび、一字一句、行と行のあいだ、さらには真つ白な余白からも、あなたの熱い息吹が、たちのぼってくるのを感じます。そうです。読者によって読まれるたびに、あなたは現世によみがえる。作家冥利に尽きることは、このことですね。

ところで先月、鳴門市出身の映画監督・浜野佐知さんの新作映画が、ニューヨーク国際映画賞の5部門で授賞、とのニュースが、飛びこんできました。その映画『金子文子 何が私をこうさせたか』は、もちろん、浜野監督のオリジナル作品ですが、早くもあなたがうんうんとうなずいておいでのように、あなたが金子文子の生と死に迫った評



大石征也副会長

伝小説『余白の春』によって切り開いた道があったればこそ、後につづく女性クリエイターたちは、その道を突き進むことができたのです。

私たちは、浜野監督の快筆を心から祝福するとともに、あなたの『余白の春』に、改めて想いをいたしたいとおもいます。先年脚光を浴びた伊藤野枝につづいて、多くの日本人にまだ知られざる金子文子が、来年そうそうにも、歴史の忘却の彼方から、具体的に、その姿を現わすことでしよう。文学の力、映画の力を、私たちは信じていいのです。

今日はこの場に、東京から、崔順愛さんをお迎えしております。崔さんはこの夏、かつてあなたが取材旅行で訪れた韓国を、あなたの足あとをたどるようにして調査旅行されました。あとで、その報告をしてくださることになっています。

瀬戸内寂聴さま。私たちのそばで、共に崔さんの話をお聞きください。ありがとうございます。瀬戸内寂聴さま。あなたが架けられた日本と韓国との相互理解・文化交流の橋を、いま、私たちは渡っていきます。本当に、ありがとうございます。

敬具

トーク「金子文子と韓国―瀬戸内晴美『余白の春』に導かれて」

崔 順愛（チエ・スネ）氏
（文学研究・翻訳家）

崔氏は今夏、韓国に帰り、寂聴が『余白の春』執筆のため金子文子の墓を詣つた足跡をたどり、朴烈記念館を訪れ、学芸員らと懇談されました。また韓国での『余白の春』刊行を機に、文子の墓が整備され、追悼碑が建てられたことも明らかになり、現在、文子が受け入れられ、市民によって顕彰されていることを、多くの歴史資料や現地の写真によって報告していただきました。



崔順愛さんの講演



聞慶・美江・ソウル探訪地図



美江

美江巡回コース

- 1 錦江→
- 2 小学校跡地→
- 3 憲兵隊跡地→
- 4 美江駅→
- 5 叔母宅跡地

崔さん作成の
スライドより



芙蓉山

美江

小学校跡地



金子文子墓・墓碑



第99周忌追悼式

朗読『あこがれ』

寂聴が最晩年に執筆し、死後刊行された、みずみずしい自伝掌編集『あこがれ』を五人の会員が朗読しました。

- 一 「あこがれ」 齋藤弘江
- 二 「履物屋の親友・宝物」 後藤恵子 佐藤安代
- 三 「サーカス」 元水薫 齋藤礼子
- 四 「父と母」

齋藤弘江

佐藤安代・後藤恵子



齋藤礼子

元水 薫



『寂聴』第4号 発行

寂聴さんと長年の親交があった藤原新也さんの追悼随筆、直木賞研究家の川口則弘さんの「瀬戸内晴美と直木賞」を巻頭にいただき、伸びやかな個性があふれた機関誌となりました。



寂聴第4号

11月27日 第4号合評会

福岡在住の作家で会員の米本浩二氏を迎え、初めての合評会が文学書道館で1時半から開催されました。米本氏のトーク「仲間のいる人生」(note) 瀬戸内寂聴記念会 に収録)では、寂聴さんが晩年、「私が死んだら会報のようなものを作つてね」と言ったのは、気の合う仲間と雑誌のようなものを作ること、互いに切磋琢磨し、協力し合つて志を貫いていけるから、私がいなくなつてもみんなががんばつてね、というエールだったのではないかというお話も心に残りました。

編集委員からは作品についての感想が述べられました。寂聴さんと共有した時間は、その人しか知らない貴重な時間であるので、今後も書き続けてほしいという意見や、この人には小説を

書いてほしいという要望も出ました。また、今号は三人の執筆者が、読書エッセイのほか、旅に出た際に北原白秋を描いた寂聴の『ここ過ぎて』に遭遇したことを書いていたのは、偶然とはいえ面白いことでした。



合評会の風景

ひろば 会員のたより

福井県在住 武井晴美様より

五木寛之氏の著書『忘れ得ぬ人 忘れ得ぬ言葉』の中で五木氏は寂聴さんに対し、「戦友」という言葉を使われていました。二〇代の半ば頃から、お二人の本を交互に読んできた私。そして、それらの本に支えられ、助けていただいた私にとって、びっくりでした。

私にとってお二人の共通点は(内容も

とても興味深く、ひきこまれるものですが……)、文章が短く、難しくなく、すつと読める点でした。アツという間に、その世界に入れるのです。私にとって、お二人は別格でした。

戦友同志のお二人と共にある私の人生。これからも支え続けていただけたらと思うと、うれしい思いになります。

いつの日にか徳島をお訪ねできることを楽しみに、今、送っていただいた時刻表と向き合っています。ありがとうございます。

お知らせ

昨年12月19日、寂聴さんの言葉を集めた本が、プレジデント社から刊行されました。企画した人は「先生の革命性というか、本質をついた語りには驚愕せざるを得ません」とおっしゃっています。「人間は好きなことが一つあればいい」など、シンプルな言葉が並び、たくさんさんの写真とともに読みやすい本になっています。

主にセブンイレブンで販売されるということです。

寂聴のことば

宇野千代さんがおっしゃるには、私たちがこの世で発揮出来る才能というものは氷山のほんの一角で、全部の才能の5パーセントしか発揮できないんですって。

この5パーセントを死ぬまでにせめて7、8パーセントに、運よくば10パーセント自分の才能の可能性を引きだして、そしてその才能を人のため世のために尽くすことに振り向けることができれば、私たちがこの世に送り出されてきた意味がわかるんじゃないかと思えます。

やはり人の幸せになるように、自分の存在が少しでも人を豊かにするように、人の慰みになるように、そういう人間になるために私たちは才能を引き出すんじゃないでしょうか。そういう風に私はやつとこの頃考えるようになったんです。

「今なぜ仏教か」

1989年10月

旧東大寺学園講堂での講演より

(竹内紀子)

瀬戸内寂聴記念会 事務局

〒770-0856 徳島市中洲町3-40-802

Fax 088-661-3292

email kikanshi@setouchijakucho.com